

諫早湾開門問題 漁業者400人が海上デモ

よみがえれ！有明海・国会通信



よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700



【佐賀新聞2014年3月24日】福岡高裁が命じた国営諫早湾干拓事業の開門調査期限(昨年12月20日)を3カ月過ぎてても国が実行しない事態を受け、佐賀、長崎、福岡、熊本4県の漁業者は24日、潮受け堤防北部排水門(長崎県諫早市)近くで海上デモを実施した。漁業者約400人が約100隻の漁船を連れ、怒りの声を上げた。

午前10時半、北部排水門前に漁船が集結。「国は確定判決を守れ、諫早湾の開門を」と記した横断幕を掲げ、漁業者は「宝の海を返せ」と一斉に声を張り上げた。

長崎県島原市の漁業者、中田猶喜さん(64)は「国は3年間の準備期間をサボタージュした。農業と漁業が共存する開門は容易に実現できる。直ちに履行せよ」と厳しい表情で声明文を読み上げた。

開門調査をめぐっては、反対する干拓営農者の訴えを認めて長崎地裁が開門差し止めを命じる仮処分を決定するなど混乱が続く。大鋸さんは「漁業被害を認めない国の姿勢が混乱を招いた。なぜ、彼らは現場を見ないのか」と指摘。同町のタイラギ漁師、平方宣清さん(61)は「有明海の悲鳴が聞こえる現状が残念でならない。これからも大きな戦いが続くので、協力してほしい」と呼び掛けた。

各県代表者が赤潮発生が早まり、今季のノリが不作となった窮状を報告。タイラギの壊滅とアサリの激減も訴え、有明海異変と干拓事業の因果関係を調べる開門調査の重要性をあらためて強調した。

ノリ網の撤去を例年より20日早めた藤津郡大良町の大鋸武浩さん(44)は「干潟の浄化作用や潮流が年々弱まっている。なぜ、こんな状況になったか。開門期限が過ぎた後、顔を出さなくなった農相や農水官僚に問いたい」と怒りをあらわにした。

